第３部パネル　分科会 27　新規

心身機能が低下しても、持てる能力を生かして高齢者が社会参加する方法とは

（企画・協力：（一社）シニア社会学会）

提言

年を重ね心身機能が低下しても、
少しの支えがあればできることはたくさんある。
支えられながらも誰かを支えることで、生きがいを
もって自立した暮らしを営むことは可能だ。
支え・支えられることが循環して、
「共生社会」が創られる。
そんな豊かな地域コミュニティを
みなの力を合わせて実現していきましょう！

登壇者

【進行役】　澤岡　詩野氏　（公財）ダイヤ高齢社会研究財団研究部主任研究員

【アドバイザー】　袖井　孝子氏　（一社）シニア社会学会会長、お茶の水女子大学名誉教授

中林　美奈子氏　富山大学歩行圏コミュニティ研究会代表

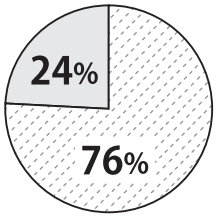
前田　隆行氏　ＤＡＹＳ ＢＬＧ！代表

椎根　渓氏　ウェルケアヒルズ馬事公苑介護主任

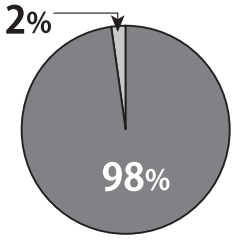
アンケートの結果

参加者概数：431名（オンライン：412名、会場：19名）　回答者数：131名

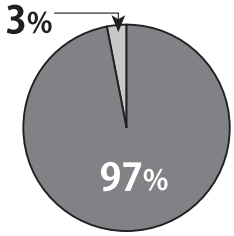
回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方



議事要旨　澤岡 詩野氏

高齢になって心身機能が低下しても、適切なサポートがあれば、自立し社会に参加することは可能である。本分科会の狙いは、従来はもっぱらサービスの受け手ととらえられてきた心身機能が低下した高齢者が社会に参加し、時にはサービスの提供者となる事例のなかから、主体性の引き出し方や多様な参加の在り方をさぐることである。このことで、高齢当事者のウェルビーイングの向上だけではなく、豊かな地域社会の創造につながっていくことが期待される。

中林氏：歩行補助車を使って高齢者がまちなか歩きをすることによって、高齢者の体力が維持され、社会参加を促進するだけでなく、高齢者の目でまちを点検することによって、コミュニティのバリアフリー化が推進される。歩行補助車の制作・改良および普及には、研究者、企業、行政、高齢者たちなどとの連携が不可欠であった。

椎根氏：有料老人ホームの入居者が、地域のイベントや保育園児への読み聞かせをし、新しい役割を得ることが、高齢者の自立といきがいにつながるだけでなく、自己管理能力の向上にも役立った。

前田氏：町田市において運営するデイサービスにおいて、認知症高齢者が就労し、収入を得ている。一般にデイサービスでは、単純なゲームや手作業などお仕着せのプログラムを提供するのが普通だが、ここでは高齢者のしたいことを最優先させており、それが高齢者の満足感につながっている。

アドバイザー：少子高齢化と経済不況が進行する今日、高齢者の自立と社会参加を推奨することは、医療・介護費用の削減、社会の活性化および高齢者イメージの変容につながるだけでなく、高齢者自身の心身の健康維持、いきがい、自尊感情を生み出す。今後の課題は、本分科会で紹介された事例から共通項を導き出し、いかにして他の地域に普及展開させるかである。

進行役：できないことに対してたくさんの助けを得ながら、できることで他者のために役立ち、プロダクティブであり続けることが大切である。支え・支え合えることの循環によって「共生社会」が創られる。このためには、高齢当事者や支援に関わる人だけではなく、地域に暮らすひとりひとりの価値観を変革していくことが求められている。

■ 寄せられた声から

- ニーズとシーズのマッチング、施設で暮らしながらも自分の力、意思で暮らす、ハタラク×仲間がいる、過剰に管理しないセルフケアのきっかけづくり。
- 袖井先生のお話に「昔は高齢者は高齢者としての役目があった。しかしそれが経済成長期から薄れてしまっている」と話されたことについて、気力体力が衰える中で年寄りとして生きていく役割を、共生社会の実現に向けて取り組みたいと実感しました。
- 中林さんがおっしゃった「ゆるく、楽しく、時に真剣に取り組めるチームの雰囲気づくり」はできるようで難しいため、そのくらいの気持ちでできればいいなと思いました。
- 前田さんの「何らかの支援が必要であっても、持てる能力を活かすことで誰かの担い手になる」との言葉に心を打たれた。生き生きとした表情で仲間と働く姿に感動した。
- 椎根さんの「施設生活から社会生活へ。老人ホーム入居後の自分らしい生活」が心に残った。